
魔法少女リリカルなのは 平和への回帰

すけかく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 平和への帰

【Nコード】

N0568M

【作者名】

すけかく

【あらすじ】

航空自衛隊千歳基地からスクランブル出動した二機のF15
Jイーグルは国籍不明機を捕捉と同時に出現した謎のホールに吸収
されてしまった。

彼らが飛ばされたのは魔法の存在する異世界。

だが、この事件はこれから起こる大事件の序章にすぎなかった。
異世界ミッドチルダをそして日本の存亡を脅かす事態。

時空管理局と自衛隊、異なる組織が交わる時、平和への戦いの幕
が開く。

はたして彼らは彼女達は守るべき者達を守りきれるか？

イーゲル消失（前書き）

ご感想ご意見よろしくお願いします

イーグル消失

平和とは常にあるものではない。一見平和なこの国も戦争と無縁とは言えない、常に戦争と平和の境を歩かされている。

平和とは川や山のように自然にあるものではない。

平和を保つ意識と行動により作られる。

国が国民が平和を維持する意識を捨てたときこの国から平和は永久に失われることだろう。

日本北海道千歳航空自衛隊基地

深夜1時をすぎ、周辺の建物は死んだかのように光が消えているが、千歳基地は昼間のように明かるい。航空自衛隊北部航空方面隊第2航空団のホームベースである千歳基地は航空自衛隊創設以来、国防の要所である。

冷戦時代は旧ソ連と事実上の膠着状態で万一宣戦布告を受けた場合、北海道が最初に戦場になる、ソ連崩壊後もそれは変わらず、国交が正常化し経済文化交流の盛んとなった現在でもロシア航空機相手のスクランブル出動は後を絶たずその殆どが軍用機である。

冷戦終了後も北海道に戦争の脅威が去ることはない

千歳基地内のアライトハンガーと呼ばれる格納庫には常に2機のF-15Jが待機し、その横の待機所にはパイロットと整備士達がスクランブル発令に備え24時間交代制で待機している。

「でだな、その時の司令殿の顔つたらな」 あるパイロットの話しにその場にいる整備士達が大笑いする。

「立川三佐ほんとすつか！その話し！」

若い整備士がパイロットに話しに大笑いしながら聞いてくる。

「いや、本当なんだな～いやあれは傑作だったね～あんたそれでも世界最強の空軍の司令の一人かといいたくなるぐらいに！」

パイロットが立ち上がってその司令のモノマネをはじめめるものだから待機所は爆笑の渦が巻き起こった。

「おいおい、慎吾、その辺りにしとけて！仮にも米空軍の司令官殿なんだしさあ」

もう一人のパイロットが笑いながら注意するが

「それにしても・・・あの顔・・・ぷっはははは」 注意したパイロットは何故か思い出し笑う始末。

「鹿島三佐・・・ミイラ取りがミイラになてますよ！しかし・・・あの米軍さえも恐怖させる『ダブルスカイナイト』がみつともないですよ・・・・・・・・」

初老の整備士が二人のパイロットを呆れた顔で見ていた。

『ダブルスカイナイト』

それは、この二人のパイロットの異名である。

鹿島衛二等空佐 32歳

立川慎吾二等空佐 32歳

第2航空団きつてのエースパイロットであり米空軍ならび日本の同盟国の空軍からは恐怖と畏怖の念をもってその異名が付けられた。

米軍との合同訓練では米軍最強の航空部隊と激闘を繰り広げ鹿島は米軍のイーグルを6機、立川は5機撃墜し自衛隊側の勝利を導いた。この二人のパイロットは個人の技術も凄いが、二機での戦闘ではその技術が活かされる。鹿島はその時の米軍の司令官の驚き様が面白かつと整備士に話していたのだ。

「だいたい、あたかも緊張感というものをですね！スクランブルかかからないからいいものを・・・」
ジリイイイイイイイ

初老の整備士がスクランブルがといった瞬間にスクランブルを知らせるアラートが鳴り響く。

立川と鹿島は整備士が立ち上がったときには既に出入口へ走っていた。

二人はアラートハンガーに待機するイーグルに乗り込み出撃準備に取り掛かるその間に整備士達が素早く出撃準備を整える。

整備士による準備、機体と装備のチェックが終了するのに約3分、誘導員の指示に従いハンガーを出て滑走路へ進入、機体を上昇させ空へ、空自のスクランブル出動は発令から5分以内に出撃するという早業を誇る。

『こちらバイパー01よりトレロ、現在高度2万5千フィート』

『トレロよりバイパー01そのままの高度を維持せよ』

『ラジャー、トレロ』

イーグルのコックピットに搭載されている酸素マスクに内蔵されたマイクでイーグル1・・鹿島はトレロ・・北部方面航空隊作戦指揮所と交信していた。

鹿島の乗るイーグルの右斜め後ろを立川が乗るイーグルが数メートルほど間隔を開け飛ぶ。空自のスクランブルは基本、二機の要撃機の編隊で飛行する、これをエレメントといい編隊指揮官をエレメントリーダーと呼び二番機のパイロットをウィングマンと呼ぶ。対領空侵犯処置においてアンノウン（国籍不明機）に二機で接近、エレメントリーダーがアンノウンに無線で警告、ウィングマンがアンノウンを撮影する。

鹿島はキャノピー越しから見える夜空をを眺めた。

暗い漆黒の闇を数多の星たちが照らしその空をイーグルが二機。

『シールド、聞こえるか！こちらソード』

突然、後方の立川から個別無線で自分のTACネームで交信してきたがいつものことなので多分くるだろうと予想してた。

『なんだソード、くだらない話しなら切るぜ！』

『知ってるかぁ、オカルトマニアがいうUFOの正体ってさあ』

『知ってんぞ、98%は夜間飛行の航空機か戦闘機、羽についた航空灯を見間違えてんだろ！あれあのての番組見るとほとんど戦闘機で出来る機動だしな！』

『そこでだなあ！知り合いに超がつくほどのオカルトマニアがいてな！月一でUFO呼び出す儀式を仲間とやっとなだと、でその儀式の終盤頃にイーグルで降り立ってさあ〜』

『俺たちが宇宙人のイーグルドライバーです。とか！面白い！』

『さすがシールド！話しが早くてたすかる！！』

『俺が司令に掛け合ってやるからソード、乗り込んでこいよ！まあ、骨は拾ってやる』

『勘弁してくれよ！本当にいけ言われたらどおすんの！』

『そのときは諦めるしかない上官命令は無視できないし！』

『やめて！うちには今年6歳になる女の子が二人いるんです！私がパイロットクビになったら女房子供路頭に迷います！この歳で迷子はいやあ〜』

『知ってるわ！美和子ちゃんに佐和子ちゃんだろ！大丈夫だ！空自の戦闘機パイロットの再就職なんて腐るほどあるから！あと俺も妻子もちなの知ってるだろう。クビになるのはやだね！』

スクランブルミッションの最中になんともくだらない会話と第三者が見ればそう言われるだろう。だが、死と隣り合わせのスクランブルミッションはどんなに経験を積もうともパイロットの精神を襲う緊張感や恐怖感から逃れることはできない、僅か数分間の会話でもパイロットの精神的負担を大幅に減らす。

もちろんベテランのイーグルドライバーは会話をしながらもレーダーと目視による周囲警戒をおこたらない。

出撃から7分程でオホーツク海上空、鹿島機はレーダーにアンノウンを捉らえた。

トレロにアンノウンのレーダー捕捉を伝え、視認すべくレーダーの機影後方につき相手の距離を詰める。
目で見える距離まで接近

「なんだ……あれは!!」

アンノウンを目視した鹿島は戦闘機乗りになつてはじめてイーグルの機内でその言葉を呟いた。

その飛行機は胴体部や尾翼がない一枚の主翼のみで機体全体を構成する全翼機と呼ばれる飛行機に似ているが、驚いたことに全長が5メートル幅3メートル、航空機としては小さい人が乗つてゐるのかと思えるほどひらべったいかもコックピットにあるべきキャノピーが見当たらない。まるでゲームのインベードのような航空機、翼には国籍を現すマークらしきものがない。

ウィングマンが撮影を開始したの確認し再びトレロに通信するべく回線を開いた直後、異変が起きた。

『こちらバイパー01、トレロ』

『こち……ザ……電波状……聞こえ……』

『トレロ！応答しろ、電波に異常あり！応答せよ』
雑音混じりのトレロからの通信を最後に沈黙。

すぐに個別無線に切り替え立川に通信しようとするも雑音しか返つてこない

咄嗟に後方を振り向きキャノピー越しから混乱しながらも指示を待つ立川にハンドサインをおくる。

無線に異常あり、そっちはどうだ？

こちらでも戦術、個別無線に異常を確認！

つまり自分の機体の通信システムではなく二機ともに通信システムに異常が発生したのだ。（システムの故障か！いや基地で通信システムとエンジンの整備は穴があく程やってるし、ほんの1分程前は正常に機能してた、ということはジャミングか！）

ジャミング、通信妨害は妨害電波などにより無線交信を妨害することだ。

すぐにハンドサインでジャミングされていると伝えようとした瞬間。

「なんだ……」

目の前に突然ブラックホールのような大きな穴が空間を裂いた。

「まずい！！ターンして回避！！」

機体をターンさせて離脱しようとしたが、アフターバーナーの出力よりも強い力によってイーグルは離脱できずに穴に飲み込まれた。

北部方面航空隊指揮所

「バイパー01、02ベールアウト!!」

管制官の叫び声が管制室に響く。

奥の司令席の司令官が力なく椅子に座って顔を真つ青にして命令する

「大至急、千歳の航空救難団に出動要請!それと空幕長に緊急連絡だ・・・アンウンとイーグルがレーダーから消えた・・・」

このことが後に日本に大きな影響をもたらす序章となる。

出会い1（前書き）

はじめに！

作者は文才はないので今回も表現が雑です。間違いやこれはおかしいという点があったらぜひご意見ご感想をお願いします。参考にしていきたいと思います

出会い1

「ここは……どこなんだ？」

謎のホールに吸い込まれて気がついたら別の空を飛んでいた立川達、空自のイーグル。

何故別の空かと言うとさっきまで飛んでいたのは海の上だったのに今はどこぞの森林の上空をとんでいる。

幸にも無線が回復し鹿島機と無線交信が出来る、がトレロとの交信ができない

ここがどこだかは立川には予想もつかないが、ここが地球ではないような気がする、その理由の一つが

『なあ、月ってさいつから二つになったんだ！』

『いつの時代でも月と太陽は一つだぞ！もう泣いていいですか？月が二つ！！もう驚きより感動のほう为上回ってるんだが！』

『とりあえず気持ちはわかるがな、この状況なんとかしないとこのままだといずれ燃料ぎれだ！』

そう、月が二つもあることから鹿島と立川はここは別の世界かたまたまは夢の中の出来事じゃないかと推測、二人とも後者の可能性を願っているが

『とにかくトレロと交信はできない上ここが日本かさえわからん、

自分達が飛んでいる場所の位置さえわからん、このままだと本当に燃料切れだ！ソード、お前のイーグルあとのくらいもつ？」

『3時間ぐらいはなんとか飛べる。』

『タイムリミットは3時間だな！』

3時間いないに正確な位置を把握し着陸出来る空港か飛行場を探し、緊急着陸のアプローチを取ったうえで着陸しなければ燃料切れでイーグルはただの鋼鉄の塊として地上に落下する。

最悪の場合は、人家のないところか河川敷にイーグルを落として出来る限り被害を少なくするしかない。

だが、飛行場や空港を探すとしても、管制官からの指示もなく、正確な位置さえ把握できない孤立した状況で都合よくみつかる訳がない。

こうもなるとイーグルドライバーも無力かもな、立川はそう思いながらもこの状況を乗りきろうと操縦席で考えをめぐらす相棒と自分を比較して自嘲的な笑みを浮かべていた。

ふとキャノピーから下でも見ようとした立川は左舷から小さな飛行物体がこちらにちかずいてくるのが見えた。

鳥か？と立川は最初に考えたが少しずつちかずいてくる物体は鳥より大きく、こちらのスピードに合わせて飛んでいるようにも見える。

そして、500メートル近くまで物体との距離がちかずいたとき立川は自分の目を疑った。

『な！……人が……空を……空を飛んでいる』

『そんな・・・馬鹿な』

イーグルにちかずにいてきた物体は、長身に長い鮮やかな金髪で黒い服を着て白のマントを羽織り手には斧のような物を持った少女だった。

『た・立川！2時方向からも人が飛んで来たぞ！』

悲鳴にちかい鹿島の声が無線に響き言われた方向を見ると、白いドレスのような服に栗色の髪をツインテールに纏め、手に杖のような物を持った少女が鹿島のイーグルに平行しながら飛行している。

『しまった！完全に背後につかれた！シールド、どおする振り切るか！！』

敵かもしれない存在を戦闘機の背後につかせることは攻撃を受けてもおかしくないということだ

『いや！待て、どうもこちらを攻撃するつもりはないようだ』

先程とは違い落ち着いた声が返ってきた。

鹿島のイーグルに平行して飛ぶ少女が下手ながらもハンドサインを必死な表情をしながら送っていた。

こちらに攻撃の意識はありません。私たちの指示に従って下さい。お願いします。

ハンドサインを解読した立川はあまりにも律儀なサインに思わず笑いそうになった。

『シールド、どうする』

『燃料の問題もあるどのみち着陸しなければならない！指示に従う！警戒は怠るな！』

『ラジャーバイパー01』

鹿島がハンドサインをおくると白い服の少女は安堵の表情を浮かべて、また下手ながら必死な表情でハンドサインをおくった。

魔法と科学が発達をした異世界ミッドチルダ、そして数多に存在する次元世界を治安と平和を護る時空管理局、エース・オブ・エースの称号をもつ高町なのは一等空尉と金色の閃光の異名をもつ執務官にしてなのはの親友、フェイト・T・ハラウンが深夜のミッドチルダ上空を飛行魔法で飛んでいた。

「なのは、もう少しで戦闘機と接触するよ」

「うん、フェイトちゃんでもどこの世界の戦闘機だろう！」

「はやての隊が発足してからまだ一週間なのにこんな事件が起きるなんて・・・なのは、きおつけて攻撃してくるかもしれない」
彼女達の親友で本局特別捜査官八神はやて二等陸佐が設立した部隊、古代遺失物管理部機動六課のスターンズ分隊とライトニング分隊の隊長として機動六課に出向しているのだが、発足一週間後、ミッドチルダで次元の震れ、つまり次元震が確認された。

震れは小規模で被害はなかったが、ミッドチルダの郊外の森の上

空に所属不明の戦闘機が出現した。

本来なら航空魔導師隊が出動するのだが、時間がかかるため航空魔導師であるのはとフェイトに出動要請が下ったのだ

「見えた！・・・速い！最低でもマッハ2ぐらい！なのは！」

なのはとフェイトは漆黒の暗闇の中を星明かりのような赤い光を放つ飛行物体を見つけた。

赤い光は翼と後尾についた航空灯、夜間飛行の航空機が別の航空機に存在を伝えるための信号だ。

そして、その光の主はたくさんの人を運ぶための飛行機でも、物資を運ぶための飛行機でもない。

音速で空を飛び、相手の背後をとり、ミサイルや機関弾という鋼鉄の剣で命を奪う戦闘機。

「フェイトちゃん！戦闘機の後ろへ回って！私は先頭の戦闘機にちかずいてサインを送ってみる！」

「わかった！でもなのはハンドサイン出来る？」

「航空武装隊のときに研修でやったきり！」

魔導師は任務中の交信は無線ではなく視念というテレパシーのよくなもので会話する。

口を動かさずに味方に指示ができるので敵に手の内がバレないと

いうメリットがあるが、魔力がない者は視念会話ができない、また航空機を誘導して飛ばないければならない場合は視念会話でなく無線かハンドサインで指示を出さなければならぬ。

なのはは航空武装隊の研修でハンドサインを習ったが、使うような事態がなかったためうまくできるかわからない。

戦闘機の真横から少しずつ距離ん詰め、大きくなるジェット音がなのはに恐怖感を与えてくる。

怖い！ジェット音が唸り声みたい！・・・もし攻撃してきたらどうしよう！撃ち落とす？できない！あの戦闘機には人が乗っているの！理由も何もしらないのに撃ち落とすなんて！

戦闘機との距離がちかずくにつれなのはの心の中は恐怖と葛藤でいっぱいになった。

戦闘機パイロット達は最初にフェイトに気づいたらしく先頭の戦闘機パイロットは驚きのあまり操縦席から身を乗り出しかけていたが、なのはにきずきもう一機のパイロットもきずいたらしい。

こちらに攻撃の意識はありません。指示に従って下さいお願いします。

相手に攻撃の意識がないことを伝え警戒心を少しでも解いてもらわなければならない。

お願い！伝わって！

なのはは自分のハンドサインが間違っていないことを願いながら続けた。

パイロットは最初、呆然と眺めていたがハンドサインにきずいてすぐに後ろの戦闘機パイロットと交信をしている。

そして！

我、貴官の指示に従う！指示を願いたい！

ハンドサインが通じたらしい。

貴方がたを着陸できる空港まで誘導します。後に続いて下さい

パイロットは指示に従ってくれたことになのは安堵しミッドチルダ空港へ誘導するためイーグルと平行して飛ぶ。

「まさか日本の飛行機とはおもわなかったよ！フェイトちゃん。」

「うん、それに暗かったせいもあるけど本物の戦闘機なんか初めてみるから緊張しちゃってマークにきずかなかったんだ」

「フェイトちゃん、それ私も……………」

なのはとフェイトは戦闘機をミッドチルダ空港に戦闘機を誘導した。彼らは管制塔の管制に従い戦闘機の機体を保ちながらミッドチルダの地上に下りた。

着陸した戦闘機を一瞥してなのはとフェイトは自分たちが見落とした点にきずいた。

戦闘機の機首と翼には、なのはの母国日本を示す日の丸が刻まれている。

つまり、彼らは日本の空軍の航空自衛隊の所属パイロットということだ

なのはとフェイトがゆっくり戦闘機に歩みよると同時に、キャノピーが開きパイロットが警戒しながら下りてきた。

グリーンのフライトジャケットに救命胴衣を着用した二人のパイロット、二人とも長身で格闘戦が強そうな体格、だが、顔は二人とも優しいそうな顔つき、状況が状況だけに鋭い目つきで周囲を観察している。

なのはが二人のパイロットに歩みよった。

「はじめまして、時空管理局機動六課高町なのはは一等空尉です。」

なのはがパイロットに自己紹介してお辞儀した。

パイロット二人は驚いたという表情でなのはをみて

「一等空尉！その若さでか！」

「それに時空・・・管理局？聞いたことない組織だ」

二人のパイロットは驚きを隠しきれず顔を見合わせる

「はじめまして。時空管理局機動六課フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官です」

フェイトが自己紹介してすぐに話を切り出した

「突然なことで混乱していると思うので、今詳しくあまり詳しく説明はできませんが貴方たちは次元漂流者です。」

「大丈夫です。管理局が保護します。もちろん自衛隊員さんに

危害は加えません。」

フェイトの後になのはがパイロットを安心させるべくフォローを入れる。

「次元漂流・・・訳がわからん・・・保護って領空侵犯罪で拘束とかじゃなく？・・・保護！」

パイロットが呆然とした顔で疑問を口にする。

「て・・・まで、さつき自衛隊員っていったよな！何故我々が自衛隊だとわかった！」

もう人のパイロットは口調を荒げてなのはを問い詰める。

「私は地球の日本出身なんです。」

「え！・・・・・・・・・・」

パイロットは驚きと混乱で黙ってしまった。

混乱している二人の自衛官の前にフェイトとなのはは

「ちよつと説明の仕方間違えたかな？なのは。」

「うん！そうだね・・・もうちよつと間を開けて話せばよかったね！」

なのはとフェイトは自分たちの説明が下手だったと俯いて落ち込んでしまった。

・この四人組が正気に戻ったのは実に30分も後のこと・・・

出会い1（後書き）

次回予告

二人の自衛官がやってきたのは若い魔導師が指揮官の部隊。

若い魔導師から語られるこの世界のこと――

この世界では小さな子供まで戦う！それは正義？

自衛官と魔導師、考えも価値観も違う両者はただ一つ共通するもの、それは？

機動六課隊長室にて（前書き）

はじめにみなさんに謝らなければならないことがあります。本来、機動六課隊長3人組とパイロットたちの話しにするはずが、長くなるため今回は隊長3人しかでません。

御了承下さい。

機動六課長室にて

機動六課長室

「ふあゝ・・・眠いよ・・・リイン、5分！5分だけ寝せてな！」

「だめですよー！！はやてちゃん！！いつも5分だけやゝとか言つて30分以上になるんですよゝ」

時空管理局古代遺失物管理部機動六課課長室の執務机に寝そべり『5分仮眠摂らせろ！コール』をしている茶髪のショートヘアで小柄の少女こそ機動六課の八神はやて二等陸佐その人である。

若干19歳ながら優秀な能力をもち特別捜査官として数々の難事件を解決へ導いた若手のエリート局員。

はやての頭の上を飛んでいる小人サイズの白銀の髪の少女はリインフォースツバイ空曹長、はやての融合騎、ユニゾンデバイスにして課長補佐という役職についている。

「リイン・・・堪忍な・・・本当・・・グウゝスカゝ・・・」

「はゝやゝてゝちゃん！寝るな！」

喋りながら居眠りに入つたはやての頭をリインは小さなハリセンをどこから取り出してはやての頭をおもいきぶつたいた

パシーン、パシーン

それも連続して二回

「痛ああい！！な・・・何すんや！人がせつかく居眠りというあの無意識な仮眠に入っとたんに！」

部隊長であるはやては毎日膨大な書類の整理や各部署からの報告のチェックや部隊予算の申請などの処理に終われ就眠するのは深夜1時過ぎるのはいつものこと、昨夜は書類整理をいつもより早く終わらせたので「これでいつもより2時間おおく寝られるで！」と喜びのあまりその場で爆天、そのほかジャニーズの人気アイドル達も驚く大技で喜びを表現していた。

いゝや！いつもより早く終わった！奇跡や！神様仏様なのは様おきに！

はやては心の中で神様仏様なのは様？に感謝していた。

だが、神様仏様となのは様？は残酷な仕打ちを下したのだった。

踊り狂うはやての部屋に空間ディスプレイが出現、それは次元震の発生と所属不明の戦闘機の出現を知らせるロングアーチからの通信だった。

それから通信司令室で戦闘機の処置の指揮、誘導した戦闘機の扱いやパイロットの保護や情報報告に終われ気がつけば日が出る少し前になり2時間程の仮眠を取ったはやてだった。

「それにしてもまさか自衛隊機とはおもわなかったわ！！」

次元漂流者つまり他の次元世界から迷いこんだものことだが、次元漂流は日本の航空自衛官だった。

「はやてちゃん、よくわからないですけど自衛隊って軍隊と違うんですか？」

リンはクビを傾げた。

彼女は地球で生まれたので世界の国々にそれぞれ軍隊という組織があつてその国を防衛しているのは知ってるが日本の自衛隊についてはよくわからなかった。

「うーん、私もよくわからないんよ、軍隊だけど軍隊じゃないってゆってるしでも戦闘機持つとるし」

はやてもやはり自衛隊が軍隊かどうかはわからなかった。

はやては中学校の日本史で、戦後アメリカの命令で設立された警察予備隊から自衛隊になったということや日本国憲法第9条で軍隊を持たないと明記していることは習ったがあまり深く考えたことがなかった。

「それにしてもあの自衛官さん、こちらの指示に従ってくれたのにはありがたいんだけど、所属も名前も教えてくれないのが痛いやなうーん！こまったわあー報告書にかけないんやー」

保護した自衛隊たちは対応にあたったはやての親友で部下の高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの指示にとくに抵抗することなく従ってくれた。

だが、フェイトが自衛官の名前を聞いたのだが二人とも頑として官姓名を名乗らない。

『失礼ながら我々は時空管理局という組織がいかなる機関であるかわからない以上、貴官たちに官姓名を名乗ることはできない』

なのはとフェイトは自衛官たちに言われなんとか名前だけでも聞こうとしたが次元漂流者であって犯罪者ではないので強引に聞き出すことはできない。

はやては彼らの言い分にも一理あると思った。

突然別世界に飛ばされ聞いたことのない組織が出てきて保護すると言われても警戒するに決まっている。

「・・・とは言つても名前や所属がわからんと本局に報告出来へんし、あの自衛官さん帰すにも必要なことや！聞き出さなきゃあかん！たぶん自衛官さんが警戒してるのは管理局が何かわからんから私らを信用してもらつてないからなんだと思うんよ！」

はやてはなんとか二人を国に帰してあげたいと思った。

同じ日本人というよりも自衛官への感謝の念がつよかった。

私たちのことを知らないところで護つてた人達や！ 悪いようにはしちゃいかん！

はやては管理局に入って平和を護るのがいかに大変か身をもって知った。

例え立場が違い彼らも平和のために働いているそんな彼らにはやては尊敬の念をもって接せねばならないと考えていた。

はやてがそう思っていたときドアのそこから親友の声がした

「はやてちゃん、入るよ」

「はい！どぞ」

部屋に入ってきた親友は機動六課の戦技教導官にしてスターズ分隊長の高町なのは一等空尉とライトニング分隊長のフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官の二人

なのはとフェイトは自衛官が乗っていた戦闘機や装備品についての調査報告にきた。

なのはが空間ディスプレイを出して説明する。

「調べたけどあの戦闘機は間違いなく航空自衛隊の主力戦闘機だったよ、F-15Jという機体名で愛称はイーグル、アメリカ産の戦闘機で日本でライセンス生産されていて公式記録では一度も撃墜されたことのない最強の戦闘機って呼ばれているだって！！」

はやてはディスプレイに表示された機体の画像となのはの『最強の戦闘機』という言葉に驚いた。

「日本の自衛隊はそんな凄い戦闘機持つとたんか！」

なのはの説明ではイーグルは日本を含めた数か国しか保有してなく、しかも日本はアメリカに次ぐ保有数とのこと。

「武装なんだけど空対空ミサイル8発に20ミリ機関砲という機関銃には弾が920発搭載していてあの自衛隊員さんたちが乗っていたイーグルにもミサイルが8発搭載されてた」

「それにしてもミサイル8発も積んだ航空自衛隊機、いったい何

をやってる最中に飛ばされたんだろう？」

フェイトが言った。フェイトは日本は戦争をしない国と知っていたから完全武装の戦闘機が飛ばされた理由がわからなかった。

「きつと訓練が何かじゃないかな！」

「まさか戦争なんてことはあらへんし訓練ちやうかな？」

なのはもはやも訓練の最中に飛ばされたんじゃないかと考えた。

この三人は自衛隊アレルギーというわけではなくただ自衛隊のことをよくわからないので自衛隊が日常てきにスクランブル出動をして領空侵犯機を追尾していることを知らないのであるが、日本人の大半が知らないことなのでしかたがない

「そや、あの自衛官さんどんな感じの人やった！」

「うーん！なんか格闘技が強そうな感じだけど優しいそんな人達だったと思うよ！」

これははやてにとって意外だった。

はやてのイメージは強面の体育教師だったからだ。

とにかく実際に会って話を聞かなければならない

はやてははやては応接室に自衛官たちを呼ぶよう指示をだした。

出会い2（前書き）

まずはじめに今回は謝ることが多いです

まず、前回から時間が空いてすいません！

いつもながら文章構成が下手、誤字が多い、表現能力なしですいません！

しかも今回はかなり長い！長すぎた！きずいたら長くなっていた！そしてギャグとシリアスのバランスが悪い！アンチ管理局要素となのは達にたいしてひどいことになってます！

本当にごめんなさい！

出会い2

私は戦場で多くの敵兵士の命を奪った。

それは戦争の中の出来事

私は自分の家族と祖国を護るために戦った。

それが正義であると信じていたからだ。

私は戦場で子供の命を奪った。

子供たちは私と同じ兵士だった。そう、少年兵だ

私は自分と仲間の命を護るため子供から奪った。

命と子供たちの未来を

もし、この憐れな兵士の願いを神が叶えてくれるなら、私は私が命を奪った子供達を甦らせてほしい。

そして、甦った彼らに私は自らの命をもって罪を償う。

ある米兵の手記より

機動六課宿泊室

「・・・なあ慎吾一つきくがここは千歳基地か？」 「・・・衛よ！
そうだったらいいな！でも考えてもみる、千歳の隊舎はこんなビジ
ネスホテルみたいな造りしてたか？」

「・・・やっぱり夢じゃなかったんだ。」

航空自衛隊の鹿島と立川は二人同時にため息をついた。

スクランブル出動して謎の穴にのまれきずけば日本ではない空に
いて、音速の戦闘機に近寄ってきた空飛ぶ少女についていつて時空
管理局とかいう機関に保護されて現在に至るわけか！

鹿島は頭のなかでこれまでのことを整理した。

「わからん！時空管理局とか次元漂流者とか！次元ってここは三
次元だろ！」

「もしかして、二次元の世界かもな！」

「そりゃいいな！だったらおれはドラ○もんに会いたいな、それ
で3日前に戻ってインフルエンザにでも感染して仕事休む！！」

「衛、の○太君みたいなこというなよ！おれだったら、もし○ボ
ックスでスクランブル出動しない世界にしてみよう！」 「だめだ
！それじゃパラレルワールドになっちまうだろ！お前、劇場版ドラ
○ものの○太の魔○大冒険とか見なかっただろ！だいたい小学5年
にもなつて自分の名前を書き間違える少年といっしょにするな！そ
もそもあのアニメは青いロボットが主人公なのか黄色のTシャツ着
た少年が主人公なのかはつきりしろよ！なんでいつも劇場版になる

とガギ大将の音痴はいい奴になるんだよ！いつもとちげーじゃねーか！なんていつも心の友いじめるの！し〇かちゃんは学校終わったら寝るまで風呂か！いい加減学べよ、お前が風呂入ってるときにいつも〇でもドアが浴室に繋がるんだよ！狙ってるのか、わざとか！腰ぎんちゃくの金持ち少年のパパ、人脈広すぎたる！どんだけ人脈あるんだよ！だいたい意味わかんねーよ普段威張ってるくせに映画じゃ急にヘタレじゃねーか、あとな・・疲れた」

「はい、ご苦労さん、気が済んだか？」

鹿島は黙って部屋の椅子に腰掛けた。

昨夜鹿島たちは管理局によつてこの施設へと連れて来られた。

領空侵犯のパイロットが入れられるのだから留置所みたいなところだと予想していた鹿島は連れてこられた部屋がビジネスホテル並だったことに驚いた。

「・・・とはいっても許可なく部屋を出られん上、サバイバルキツトと9mm拳銃も没収、しかもここがどこで管理局は何かも教えてもらえない、まーしゃーねか、こちらも官姓名名乗ってないし。」

立川が腕を組んでいった顔は笑ってはいるが不機嫌なのは間違えない。

「・・・しかたがない、正規の組織ともわからない連中に官姓名なのれるか？しかも18歳ぐらいの子供が一等空尉の階級なのがおかしい」

鹿島も立川も共通の疑問を持っていた。

時空管理局、名前を読む限りでは何か管理する行政機関、別に管理局なんて名前の行政機関は世界中に無数にある、問題は時空を管理する機関と読めることだ

そしてその機関の職員の階級が18歳ぐらいで一等空尉を名乗った、つまり管理局は軍事組織とみて間違いはないだろ。

だか、だったら何故管理局とか行政機関風の名称なのか？別に時空管理隊とかでもいいはずだ

しかも、高町なのはとかいう職員はどうみても若い一尉という階級は彼女の年齢にはあまりにも不似合いだ

一尉とは他国の軍隊で大尉の階級だ。自衛隊ではこの階級は防衛大学と幹部学校出のA幹部と一般大学から幹部学校に入ったB幹部にとつては佐官になる登竜門、叩き上げのC幹部には自衛官人生のゴール地点なのだ、とても鹿島からみて子供の彼女の肩書には不似合いだ

もし、そうなら士官学校のようなところを一年程度で卒業して士官研修を飛ばして実働部隊に配置されて一尉になった、あるいは戦時中の日本同様に士官が不足して大学生を短期間で教育して士官にしたのか、このどちらかしかない

だか、昨夜の彼女たちは新任の士官にはとても見えなかった、ベテランの風格すら感じた。

「わからないー考えても混乱するばかりだ。」

「同感だなあ！」

しばらく部屋が沈黙したがすぐにドアのノックで破られた。

「失礼します。自衛隊員さん。」

ドアが開くほんの数秒間に二人は立ち上がり直立不動の体勢をとった。

「おはようございます。気分はいかがですか？」

入ってきたのは高町なのは一等空尉だった。

「おはようございます高町一尉」 鹿島と立川は敬礼して応えた。

「敬礼も敬語もいいですよ！私は年下ですし！」

なのはは困った顔で二人に言った。

なのはにとってみたら年上の人達に敬礼され敬語で話されるのが嫌なのだろう

良く言うなら年上の人を敬い、階級付きで呼ばれるのをあまり好まない性格だと鹿島は分析した。

たしかに鹿島と立川なのはより年上かつ階級も上そして、彼女達の分析が間違いないなら『将校』としての勤務年数も社会人としての年数も上だから敬礼も敬語もいいのだが、他国の士官には礼節を持ってと教育をされた上彼女達には階級はおろか名前すら教えないからしょうがない

「自衛隊員さん、朝早く申し訳ありませんが機動六課長がいろいろ事情やこれからのことも含めお話したいとのことで応接室まできていただきたいのです、よろしいでしょうか」

なのはの話を聞いた鹿島はやはり目の少女のことがわからない
と思った

喋り方や口調は軍人っぽくないがめりはりある話し方はとても半人
前の士官とも思えない、そして

尋問するならそう言えよ!!

どうゆう話をするかは目に見えていた鹿島はとうまわしに『尋
問するからこい』と言っているようにしか見えない。

「わかりました。兩名同行いたします。」

鹿島が代表して尋問？に従うといった

なのはは固い口調の敬語に顔をしかめるた。

「あの・・・私の事を警戒してるのはわかります時空管理局が
どうゆう組織なのかわからないからと言うのも・・・でも私達け
して自衛隊員さんに酷いことなんかしません!!信じてもらえませ
んか!・・・今は解ってもらえないかもしれない!でもわかつて
もらいたいです!」

なのはは叫ぶように鹿島達に言った。

それは、彼女にとってみれば自分達の事を信じてもらえないから警
戒されているんだ、という彼女の心の中の焦りが吹き出してしまっ
た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鹿島も立川も黙って彼女を見つめことしかできない

わかってる彼女がいつても、自分達を信じてほしいというのは！わかるさ！君の目は本当にそうだと言っている、・・・

鹿島は目の前の少女に語るように心の中で叫ぶ、鹿島には彼女が情報を聞き出すために芝居をしているなんて思えない、たが自衛官は自分の憶測で対照を判断するな！が鉄則と防衛大学や空自幹部校で叩き込まれた鹿島はどうしても彼女を信じようできない。 刑事がやっていないと否認する参考人を信じないように。

黙っている自衛官にここでこれ以上頼んでもだめだと思ったのか、一瞬、悲しそうな表情をこちらにむけだがすぐに入口の方を向いて「・・・応接室に案内いたします。」とさっきより小さな清音の声を紡いだ。

なのはの後について鹿島達は機動六課の隊舎の廊下を歩く。さりげなく建物を観察してみたが、印象というと軍隊の施設というよりどっかの会社のような空気が漂っていて軍隊特有の緊張感とびりびりした空気を感じさせないことだろう。

さらに鹿島は違和感を感じていた。廊下ですれ違う機動六課課員たちがほとんどの年齢が20代ぐらいの課員しかいない、30代ぐらいの課員とは人もすれ違わない。

中堅隊員やベテランの30代以上の人間がいなのでは部隊はなりたたないのではないか。

しかも、すれ違う課員たちの髪型や靴の種類に全く統一感がない、男性では髪はあまり長くはない、だいたい1cm〜2cmなのだが、自衛官の鹿島からしてみれば長いと感じる。

陸海空自衛隊の男性自衛官は髪の長さは5mm以内が鉄則。

さらに女性隊員は髪型も長さもばらばらだ、自衛隊どころか警察もみたら驚く

もしここに警視庁葛飾署の大〇大〇郎巡査部長がいたら竹刀振り回して指導を行うだろう。

「なのはさん！おはようございます！」

やけに若い、いや子供の声が響いたので鹿島が驚いて声のした方をみると15歳ぐらいの二人の少女と遅れながら10歳ぐらいの小さな少女と少年が走ってきた。「みんな、おはよう！聞いてると思うけどこちらは次元漂流者のパイロットさんでこれから八神部長とお話ししないといけないから朝練はヴィータ副隊長がやってくれるのでみんなよく副隊長の言うことを聞くんだよ！」

なのはが四人の子供に言うとき子供たちは返事をして鹿島に挨拶してきたのでそれに困惑しながら軽く会釈した。

子供たちが走って言ったあと鹿島は

「あの子供たちは？」

というとなのはは

「あの子たちは機動六課の前線メンバーの子供たちです。」

その言葉に鹿島は絶句した。

前線メンバーということは現場で働く隊員とうことだ。あんな歳の子供たちが前線メンバー？馬鹿な、まだ小中学生ぐらいじゃないか！そんな子供を現場で働かせているのか！

さっきの子供たちと現場という言葉がまったく結び付かない。

親は承知しているのか？

いや！ありえない！あんな歳の子供が働くのを許すわけがない！
じゃなんだまさか拉致したり親のいない子供を局員として使っているというのか？

そこで鹿島は目の前の士官の背中をみてあの疑問の答えが頭を過ぎった。

もし、管理局が軍事組織だしたらあの子供たちは間違いなく『少年兵』ということになる、国際法で禁止された子供を軍人として戦争で戦わせる行為、そして、今なお世界中の紛争地帯の武装組織には数え切れないほどいるとおもわれる『少年民兵』、もし時空管理局という組織が少年兵を局員としてしかもさっきの10歳ぐらいの男の子と女の子ぐらいの子供を戦わせているならば目の前の彼女ももしかしたらあの子供達と同様に！

あの子供達はどうしてあんな笑顔なんだ！子供なのにこんな訳のわからない機関ではたらかされて、もしかしたら『殉職』する可能性だつてあるのに！！なんで・・・なんで笑ってられるんだ、・・・

鹿島の『少年兵』のイメージとさっきの子供には大きなギャップがある。

「・・・それですね」　なのはが何かを説明していたが鹿島にはその言葉が耳に入ることにはなかったが代わりにある自分の言葉が頭の中を過ぎる

『その子供は私に銃を向けて撃ってきたんだ、だから私はその子供を撃った、……。その子供だけじゃない、そのテロ組織にはアメリカの空爆で家族を失って復讐心だけでテロリストになった子供がたくさんいたんだ……。私は自分の娘と同じ年の子供を何人も撃ったんだ！イラクでアフガニスタンで！戦場で子供が武器を向ければ我々は敵兵士でその子供も我々にとっては敵兵士なんだ！……撃たなきゃな！撃たれるだ……。いまでもそんな自分勝手な理屈で子供を殺した自分を……許せている……。』

3年前、米空軍との合同演習で知り合いになったパイロットの兄で海兵隊少佐としてイラク戦争で戦った軍人に言われた言葉だった。彼は鹿島にいった。『自分が海兵隊に入ったのは家族や合衆国を護るためだ、なのに我々はイラクで大勢の少年兵を殺した！子供を……』

その海兵少佐は軍人であると同時に、父親でもあった、だから、『敵』と割り切って『少年兵』を撃った自分自身を憎んでいる、それ以上に彼らを『兵士』として戦わせる大人も許せない。

彼の言葉に黙って聞いていることしか出来なかった『戦争を知らない軍人』が『戦争の現実を知る軍人』にかける言葉がなかった。

あの子供たちはわかっていいるのだろか戦場にでて敵に銃をむければ『少年兵』として殺される、死なないためには敵を『射殺』しなければならぬことを！

時空管理局はなんのためかは知らないけど子供に犠牲を強いるなど正気の沙汰じゃねえ！子供をなんだと思っていやがる！まだ遊びたい盛りの子供だぞ！もしもあの子供たちになにかあったらどうするつもりだ！

鹿島は時空管理局に怒りの念を持ちはじめていた。彼も海兵隊少佐同様、軍人であると同時に8歳の子供の父親なのだ、子供を戦はせる組織に怒りを持たないはずがない。

鹿島だけでなく立川も同様、彼はただ黙ってなのはの後ろ姿を睨んでいた。

その目には怒りや軽蔑の文字が浮かび上がっていた

二人の怒りは父親としての怒りなのだ。

それでも怒りの声を口にしないのは二人が自衛官だから、自衛官という三文字がなんとか踏み止まらせている。

もし、彼らが自衛官でなければ何も気にすることなく怒りの声をあげていただろう。

あの子供たちと別れてから歩いたら3分もしないだろう距離の場所に応接室に到着したのだが鹿島にしてみれば1時間にも2時間ともおもえた。

なのはがドアをノックして中の人物に声をかけた

「高町なのはは一等空尉、次元漂流者のパイロット2名をお連れしました。」

「はい、どうぞ」 中から若い女性の声が聞こえた。

「失礼します」

応接室には高級そうなテーブルとソファがあり部屋の中には二人の若い少女が二人いた。

一人は昨夜、マツハで飛ぶイーグルの横を飛んできた金髪の少女
フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官だ、昨夜とは違って髪は腰辺りまで伸ばし黒いリボンで纏め服装も上下黒の制服を着ている。

もう一人の少女は、茶髪のショートヘア、小柄の少女、制服は焦げ茶色の制服を着ている。

敬礼しながら鹿島はこの二人を観察した。一つの部隊の幹部の制服が三人とも違う、部署によって制服が違うのか！それにしても三人とも１８歳か１９歳ぐらいの子供じゃねーか！こんな子供に幹部が勤まるのか！

「はじめまして時空管理局機動六課長八神はやて二等陸佐です。」

茶髪の少女、八神はやてはが自己紹介したが、またしても鹿島そして立川も驚愕した。

二等陸佐！この歳でか！

鹿島は驚きのあまり瞬きすらわすれて彼女を注視し立川にいたって口を開けたまま立ちすくんでいる

だが、すぐに我に帰って再び敬礼する

「失礼しました！八神はやて二等陸佐！！」 立川も慌てて敬礼の姿勢をとる

一方のはやては年上のしかも自衛官に敬礼され階級付きで呼ばれたので恐縮してしまった。

なにせはやては本物の自衛官を見るのがこれがはじめてのことだ。

「そんな敬礼なんていいですよ、階級が二等陸佐なんていつでもそんな偉い訳でもないし」

だが、彼女がそう考えていても階級が絶対の縦社会の権化である自衛隊では例え年齢が下だろうと階級が上ならば敬礼敬語さらに階級付き呼称は当たり前なのだ。

だが、いくらなんでも彼女に二等陸佐の階級は不似合い過ぎる

鹿島は敬礼されてオロオロしてる未成年の二等陸佐をみて思う。

二等陸佐とは陸上自衛隊の階級呼称で他国で陸軍中佐の階級、二等陸佐が偉くない訳がない、陸自でこの階級の者は連隊の副隊長、さらに陸自の精鋭部隊の一つ対馬警備隊の隊長は二等陸佐が就くし、海上自衛隊ではDD護衛艦や潜水艦などの艦長は二等海佐が就き、航空自衛隊では各飛行隊隊長は二等空佐が就く、自衛隊で二佐はそれほどどの階級であるため二佐になることじたいそんな簡単なことではない。防衛大学校や幹部校を上位の成績で卒業した者しか任命されない、しかも任命されても40歳はゆうに過ぎる。

つまり、この歳で二等陸佐なのありえない。

「どうぞ、座って下さいあ！コーヒー忘れとった」 はやてがソファーを勧めるたので軽く一礼して座る

「え〜と、まずなにか話したらいいかな?・・・」

はやてがどう話を切り出すか困って口ごもるがそれを気にせず鹿島が切り出す。

「八神二佐！本来であれば官姓名を名乗らねばならないのにも関わらず時空管理局という機関がこの国家の機関かわからないため所属官姓名を明かさなかったご無礼をお許しいただきたい！また我々は貴国の領空を無許可飛行をしたが我々は故意に領空を侵犯したわけではありません！どうか弁明の機会をお与え願います！」
三人は鹿島の軍人特有の固い早口言葉に圧倒されてぱかんとしてたが、はやてが咳ばらいして話を始める

「そのことですが、お二人は次元漂流者という扱いなので領空侵犯とかにはなりませんので安心してください！もし上がなにか言ってきたらわたしが全力で突き返しますから！！」

はやてが力強く言ってみせたが鹿島にはとても信じられる話しでなかった。

この若すぎる二等陸佐に上層の命令をくつがえすだけの権力やコネクションがあるのかが疑問であるし、領空侵犯は言ってみればその国と国民の平和と安全を脅かす行為なのだから次元漂流者とかいう扱いだけで無罪放免になるのだろうか？

「八神二佐、その次元漂流者とは？」

領空侵犯という最大級の犯罪をも上回ることなのだろうか？

「その前にこの世界についてお話ししたいと思います」

その後、はやての話しはとても信じられる話しではなかった。

彼女によればここは地球ではなく異世界、次元世界とよばれる世界で無数の次元世界が存在しその世界の治安や行政など一元的に管理する治安警察機関と軍事機関さらに司法機関を統合した組織が時空管理局だという、時空管理局の管轄に置かれた世界を『管理世界』

と呼び管轄外の世界を『管理外世界』と呼ばれていて地球は『第97管理外世界』と指定されている。八神はやてと高町なのはは日本出身らしい。そして、彼ら自衛官を驚かせたのは次の一言だった
「こんなことを信じてもらえるかわからないですが魔法って信じますか？」

鹿島はぼかんとしながら三人を見つめ、立川にいたっては『お前らふざけてんか！』という顔している

「あの魔法ってあれですよね物飛ばしたりとか動物とかに変身したりとか？」

鹿島が一般的な魔法のイメージを口にするると立川も

「魔法ってメガネかけた少年が魔法学校で巨人トールや大蛇バジ○スク名前をいってはいけないあの人ボ○デモーと戦うあれですか！」

て・・・違うだろう立川！

鹿島は心の中でツツコミをいれた

いくらなんだってその話しはまずいだろ！絶対ウケないから！

「あの映画はすごかったですよ！わたし見ましたよ！」

「うんうん、あの映画は凄かったわーCG使ってるのにまるで本物みたいやったわー」

「映画も見ましたど小説家もいいですよ！」

あれ？ウケた！ウケちゃたよ！

しばらくの間三人の少女＋自衛官のハリー○ッター談義が続いた。

「つまり・・・この世界には魔法が実在していて科学の一種として捉えられていると！」

鹿島が呆れた声でいった

彼女は予想内のリアクションだったらしく涼しい顔で受け流したが、立川の一言が彼女達を傷つけることになることを鹿島は予想すらしてなかった。

「大丈夫ですか！やはりその歳で二等陸佐や一等空尉に執務官つて情報士官みたいなものでしょ、まあいいや、精神的に大変でしょう！そりゃわかりますよ！どうです、親戚に腕のいい精神科医がいるんですが診てもらったほうがいいですよ！絶対診てもらったほうがいい！！！」

真顔で立川が精神科医の名前を言うのでさすがに三人ともショックだったのか下を向いてぶつぶついいはじめた。

「そりや自衛官さんの言うとおりやな・・・最近睡眠時間短こうて精神てきに疲れたんやな」

「精神病なの」

「そっか私精神病だったんだね」「あれ？おれなにか悪いことしたか？衛」

立川が沈んだ三人をみて鹿島にキョトンとした顔で聞いてきたが、それを無視した。

「だいち魔法ってそんなものがあるわけがない」

立川が言うとなのはが不敵な笑みを浮かべ指を立てると指の先にピンク色の光る球体が浮かび上がる。

「うそ……だろ！」

鹿島が目丸くして球体に顔をちかずける

「は……そんなの出来のいいマジックだ」

顔を真っ青にしながらもなおも否定する立川に今度はフェイトが不敵な笑みを浮かべ金色の三角形の宝石を取り出し

「バルディッシュ、セット・アップ！」 オーライセット・アップ

フェイトが叫ぶと宝石が機械音声がはっせられると宝石が光り、金色の球体がフェイトを包みこんだ。5秒ぐらいたって光からでてきた彼女を見て立川は大量の汗を流しはじめた。

光から出てきた彼女の姿はさっきまでの制服ではなく昨夜の黒い服に白いマント、それに斧みたいなものをもって立川を挑発するような顔で見ている。

「どうですか？信じてもらえますか魔法を？」

今度ははやてが不敵な笑みを浮かべて立川を見る。
もはや立川は顔を真っ青にして力無く座りこんだ

「自衛官さん！時空管理局がどうゆう目的の組織であるかわかつ

ていたたぎりましたか？自衛官さん！わたし達のこと信じてもらえな
かもしれない！でもわたし達は自衛官さんたちを助けたいんです！
それにはどうしてもお二人の名前を教えてほしいんです。お願いし
ます！」

はやてはそう言つと二人に頭を下げる。

鹿島は立川の顔を見た、立川は黙つて首を縦に振る

「わかりました。本来ならすでに官姓名を明かさなければならな
いのにこちらの都合でこの時まで明かさずご迷惑をおかけしました。

」

鹿島が軽く頭を下げるがそのその顔は先ほどまで狼狽していた顔で
はなかった

居住まいを正し鹿島達は力強く立ち上がると二人同時に敬礼の体勢
をとる。「日本国航空自衛隊北部航空方面隊第二航空団第302
飛行隊所属鹿島衛三等空佐です。」

「日本国航空自衛隊北部航空方面隊第二航空団第302飛行隊所属
立川慎吾二等空佐」

そこには驚いて顔を真っ青にしていた先ほどの二人はいなかった。
踵を合わせ胸を張り力強く敬礼をするその姿はまさしく国防の重責
を担う自衛官の姿だ

「さ・・三等空佐！」

今度は三人組が驚いている。とくに一等空尉のなのはや一尉相
当官のフェイトの慌てぐわいは半端ではない、年齢も上でしかも階
級も上なのだから、しかも三等空佐はそうとのベテランパイロット

であることを意味しているわけだ。　「す・・すみません！まさか三等空佐さんなんて思いもしませんでした！」

「本当にすみませんでした！」

「いやゝあまりにも若く見えただで三等空佐とは思いませんでした。」

三人組が慌てて謝りながら敬礼するが慌てていたせいか鹿島達より見劣りしていた。

「いえ！階級を明かさなかった我々も悪いのですから謝らなくて結構です」

慌てふためくなのは達を尻目に威厳ある口調で謝罪する鹿島。

それから改めて鹿島達がこの世界にきた経緯を説明したが防衛機密に触れるところは伏せておく。　「ふゝん！やつぱりそのブラックホールみたいのが原因やな！でもなんやろ、それに鹿島さん達が目撃したやつも話を聞くかぎりやとカジエトにそっくりやし！」

いつの間にかはやては関西弁になっていたが、同期の中に関西出身がいて標準語で話したときのイントネーションがはやての喋り方と似ているのでたぶんそうだと鹿島は考えていたのでさほど驚かなかった。

「でもなんで地球にカジエトが？鹿島さんそのカジエトもホールに飲みこまれたんですか？」

フェイトが疑問を口にした。

「わからないな、なにせ穴が出てすぐ機体をターンさせて回避しようとしたから、確認してないんだ」 鹿島はフェイトの疑問に答える。ちなみに敬語じゃなくなったのは鹿島達が三等空佐でなのは達より上階級である上はやて達はあまり年上の人に敬語を使われると悪い気がするので敬語じゃなくていいと頼んだからである。

「それにしてもなぜこの世界の兵器が？それにそのガジェットとやらは通信妨害みたいな芸当でできるの」

鹿島がフェイトに言った

「いえ、そのような機能は確認されていません」

ガジェットとはこの世界で最近問題となっている自立機動兵器、早い話しがロボット兵器のことらしくガジェットはロストロギアと呼ばれる古代遺失物、大昔に作られた危険な発明品のうちレリックと呼ばれる危険物を感知して回収しようとするらしい。

機動六課はその兵器の対策とロストロギアの確保を主な任務としているとのことだ

「一つ聞いていいか？」

いままで黙っていた立川が口を開いた。軽い口調だが、顔は険しい。

「機動六課はそのロストロギアとやらの確保が任務だつていうけどその過程でロボット兵器と戦うわけだろ、さっき廊下であつた子供が戦うわけだ！時空管理局は銃器や重火器を装備してなくて頼みの魔法も使える人間とそうでないのに分かれていて実働部隊の人手が足りないから子供でも魔法が使えれば局員として戦わせるんだよ

な！

はやては黙って頷いた、他の二人は立川の剣幕に押され何もいえない

立川が言っているのは時空管理局は銃器や重火器などの通常兵器を持つことをこの世界の国際法で禁じているというのだ。

彼女達の話しによれば大昔、通常兵器が世界中で乱用され大戦争が勃発して世界中が混乱していたらし、その混乱を治めるために世界政府のような役割を果たす時空管理局が創立し戦争中の世界に介入し戦争を終決させていき管理下におくことにより平和を築き上げてきた、そして管理局はもう二度と戦争が起きぬように通常兵器を質量兵器と呼称し質量兵器の生産、販売所持を禁止し、時空管理局はその治安維持の手段を質量兵器ではなく魔法または魔力を使う兵器を用いることにした。

それにより質量兵器による戦争はなくなったが、人手不足問題が発生した。

魔法はこの世界に生まれた者すべて使えるわけではなく『リンカーコア』という結晶体の細胞のようなものを体内に持って生まれた者しか魔法を使うことができない。そうなる毎年管理局に入る新人魔導師の数はその世代によって多小はことなり、定員にバラツキが出る。これを打破するための策に未成年の魔導師を局員として教育を施し現場に送り出したのだ。

人局は強制ではなく志願制だがそれでも毎年数百人規模の未成年魔導師が管理局に入る。「つまり、君達の組織は子供だろが魔力があれば局員として扱っし、能力があれば子供でも士官になれるわけだが、これはおかしい話だ」

立川が感情の読み取れない口調で言う、長年の相棒が怒りを抑えながら話しているのを直感する。

「おかしいってどこがおかしいんですか！みんな誰かを護りたいという思いで頑張ってるんですよ！」

フェイトが怒りの形相で立川を問い詰める。

「たとえ子供だろうと危険な現場に駆り出され危険な仕事させられ、怪我しても当たり前、死ねば名誉の殉職だ、いいか！老若男女の市民を護るのが警察と軍隊の仕事だ、それでもってそれを担うのは大人の仕事だろ、その大人が！子供を兵隊にして戦わせて！責任を押し付ける！こんなのがおかしくないわけねえだろが！」

立川は怒鳴ってフェイトを睨む、その形相になのははやてが小さな悲鳴をあげるが、フェイトは臆するどころか立川の『兵隊』という言葉に怒った。

「兵隊！あの子たちは兵隊なんかじゃない！取り消してください！！！」

「じゃあなんだ！まさか少年警官でも呼ぶか？どちらにせよ管理局は軍隊でそこにいるあの子たちは少年兵なんだよ、子供を犠牲にしてなにか次元の平和を護るだ？ふざけんな！！親も親だ！どうしてあんな、あんな小さい子供を兵隊にするんだ！おれには理解できない！戦争でもないのにどうして子供を兵隊にするんだ！」

それは子煩悩な父親の怒りの声だったかもしれないだが、それはフェイトの心を突き刺す残酷な剣となった

フェイトはその場に崩れ落ち虚ろな目を立川を見たその表情に鹿島は息を呑んだ。

「フェイトちゃん！しつかりせいや！」

「フェイトちゃん！・・・立川さん！フェイトちゃんに謝ってください！・・・あの子たちはエリオとキャロは・・・フェイトちゃんが保護責任者なんです！」

「な・・・保護責任者って義理の親！」 立川は絶句した。彼女が言うにはさつき廊下ですれ違った赤髪の少年とピンク色の少女はある理由でフェイトに保護されそれ以来彼女が保護責任者として二人の親代わりをしてきたのだ、管理局に入ったのも機動六課に入ったのも二人の意思で入ったのだ。フェイトはそんな二人を護るため自分の分隊に入れたらしい。

だが、その行為に鹿島は怒りを覚えた。
自分の分隊に入れて子供を護るといふ親心かもしれないだが、それは鹿島のような自衛官に言わせれば危険な考えだ。

「フェイトさん！君の気持ちはわかる！おれも立川も親父だから！だけど・・・護るためとは言え自分の子供を部下にするなんて間違えてる！」 鹿島は静かにフェイトに諭すような声でいった

「間違え・・・・・・・・」

はやてとなのはに支えられたフェイトは鹿島をみた

「君は・・・部隊や護るべき市民のために大切な家族を切り捨てられるか？」

はやてもなのはもはっとして鹿島を見る。

「おれたち士官は隊員を・・・仲間を一人でも多く連れ帰るのが仕事なんだ、仲間を連れ帰るのがな、けどどうしても仲間の命を切り捨てなければいけないことがあるかもしれない！その時に非情な決断をしなければならぬのは士官なんだよ！おれは仲間を絶対生きて帰したい、けど一人でも多くの国民を護るために自分自身の命を捨てる覚悟も、部下を切り捨てて覚悟もある！生半可な覚悟で幹部自衛官は勤まらないから！でも君にはあるのか！自分の大切な家族を切り捨てて覚悟が？もしものときにあの子たちを切り捨てられるか？・・・なにかを護るってことはな！ときに大を護るために小を切るってことが必要になるんだ！君に・・・親の君に自分の子供を切り捨てられるか・・・おれには自分の子供を切るなんてできない・・・」

いつの間にか涙を浮かべながら言っていた鹿島、部下を捨ててでも国を護るのは鹿島にとって最も残酷な覚悟なのだ。

フェイトもなのはもはやもただ黙って歯を噛み締めるしかなかった。部下思いの彼女たちにとっては鹿島の言うことは最も許せないことなのだ。

だが、何かを護るにはそれぐらの覚悟があると現実を突き付けられたとも思ふのは達。

フェイトがふらつきながらも立ち上がり鹿島を見たその表情は虚ろではなく力強い覚悟のある者の顔だ

「鹿島さん！あなたがそれほどの覚悟を持っているのはわかります。でもわたしにもあの子たちを護り通すという覚悟があります！例え甘いと言われても、あの子たちを切り捨てない絶対に護って任務も成功させる！」その力強さに鹿島はなにも言い返せない。

フェイトさん・・・その覚悟を貫いてくれ！部下を捨てるなんて残酷なことフェイトさんにも君らにもしてほしくない！どうかその覚悟忘れるな！

鹿島はそう願うことしかできなかった。

出会い2（後書き）

次回予告

自衛官達が異世界に消えた頃、彼らの知らない場所で彼らはある
思惑に巻き込まれていく。

交際する思惑と真実と新たな謎

それはまさに国を舞台としたゲーム

市ヶ谷の陰（前書き）

今回は本編に繋がる重要ストーリーですが、なのはたちは名前のみ出ます。あとオリジナルな名称が出てきます。気になるかたはぜひ英字辞書を調べてみてください

感想ご意見よろしくお願いします

市ヶ谷の陰

東京市ヶ谷防衛省

市ヶ谷防衛省は日本最大数の公務員を抱える自衛隊を管理し、防衛予算、人事災害対策及び危機管理、防衛政策の立案を司る機関

その地下の某会議室

学校の教室並の会議室の中央には円卓の高級なテーブルが鎮座し、防音性の壁には雄大な富士山を描いた西洋画が飾られていた。

今この部屋を使用する二者の服装は二種類に分かれて円卓の席に座っている。

高級なスーツを身に纏った者達と緑青白の三種類の軍服、それも襟と胸に付けた階級章は彼らが高い地位にいる軍人であることを現している。

重苦しい空気と沈黙を打ち破るように洋画を背に座る男性が口を開いた。

「それでは、召集された出席者の方々が全員揃ったのではじめましょうか。ここにお集まりの皆さんは今回の件のことはご存知かと思いますが統合幕僚長より詳しく説明を賜ります、時間の無駄とか野次を言わずご静聴願います。では林陸将お願いします。」

男性は冗談を交えながら司会役をするが、四十代半ばの男性を誰も咎められない。

「はい首相、ではご説明いたします。本日深夜１時過ぎ、航空自衛隊北部航空方面隊千歳基地をスクランブル出動したＦ－１５Ｊイーグル二機がオホーツク海上空にて国籍不明機を捕捉後に通信電波に異常が発生し通信不能に陥りその直後に国籍不明機及びイーグルがレーダーから消失、深夜１時３０分に北部航空方面隊司令官より航空自衛隊幕僚長に非常回線にて報告し空幕長より防衛大臣並びに総理大臣に非常事態報告、午前５時先遣した第一陣の救助搜索隊と第二陣搜索隊及び海上自衛隊第１５護衛隊の艦艇が現場海域にて搜索を開始しましたが、パイロットもまた機体残骸も発見されておりました。」

「田村空幕長、説明願います」

総理の指名に青の軍服の軍服の男性が立ち上がった

「はい、行方不明になっているパイロットは北部航空方面隊第二航空団第２０３飛行隊所属鹿島衛三等空佐、立川慎吾三等空佐です。年齢経歴などはお手元の資料に記載されております。」資料を一斉にめくり記載された内容に感嘆の声が上がった。

「防衛大学と幹部学校にパイロット養成コースを優秀な成績で卒業、・・・国内並びに国外の空軍との合同訓練では負けなし！・・・俗にいうエースパイロットですね」

若い首相は真面目とふざけた口調を混ぜた喋り方だが、ここにいる全員がこの政治家の政治スタイルであることを理解している。

「田村空幕長、残骸が見つからないといっていたが・・・」

総理とは２０歳ぐらい歳が上の男性が手を挙げて聞いてきた。卓上には外務大臣と書いたプレート

「それに関してですが、イーグルがレーダー上から消失する直前にこの二機は機体をターン・上昇させ半円を描くようにして離脱しようとしていたのを確認しました。」

「離脱！・・・なぜ？攻撃でもされたというのかね」

「いえ、仮に空対空ミサイルや地対空ミサイルまたは艦対空ミサイルによってイーグルが撃墜されたとしたならば撃墜までをレーダーで察知しますが、レーダーにはミサイルをいつさい察知しておりません、それに撃墜されたならば何かしら機体残骸が海域で発見されます、しかしながら残骸すら発見してません。またなんらかの影響で機体が空中分解したとしても機体残骸が残ります。」

「空幕僚長、はつきりいうとなんなんですか？撃墜でも空中分解でもない？残骸すらないつまり・・・」

外務大臣と空幕長のやり取りに総理が入ってきた

「イーグルは撃墜も空中分解もまた墜落もしてない文字道理、空中で消えた、ということです。」

空幕長の一言はとても現実的ではなかったが、的をついたような言葉だった。

もし、ここがただの会議場でなければ批難や野次で壮絶となるだろうが、ここに集まった者は防衛、外交、治安、情報など国の中枢機関から集まった者達、野次で場を混乱させるしか脳のない議員とは格が違う。

「・・・それとここから先は、第一級の国家防衛機密のケースなのですが、今回のイーグル消失と同様の事件がございました。Fケースという言葉をご存知かとございます。」

空幕長の言葉に全員が息を呑んだ。

「・・・たしかに今回の件は30年前のファントム消失・・・それに未確認世界の機関T・A・S・A・S、通称 タサズ との接触・・・Fケースと長きにわたり特殊機密指定と称され一握りの人間しか関わること許されない・・・Fケースに酷似してますが・・・情報本部長、何か動きはありますか。」

「現在、海鳴市に在住の対象『R・H』動きはありません。もし、Fケースだった場合は対象『R・H』が情報を我々 情報本部 指定の『連絡窓口』に情報入れると思われます。備考であります。同市出身の監視コード『T・N』の実家にも動きありません。以上です。」

陸自の制服の男は無表情で説明を終えた、無表情な自衛官が指示を貰おうと総理の顔をみて、一瞬銃で撃たれたかの衝撃をうけた。

さっきまで余裕の笑みを絶やさなかった総理は怒りの表情を浮かべ

「『T・N』めえ！・・・」

小さなつぶやき、しかしそれはここにいる全員を恐怖するほど低く殺気すらある

総理は視線にきずいたのか苦笑しながら

「すいません。どうも彼女達の監視コードを聞くと年甲斐もなくへそを曲げてしまうものでね・・・本部長、赤四国の動きは？」

「いえ、四国に軍事的政治的アクションは確認されておりません。」

「わかりました。今回の件は事故、他国の軍隊の攻撃それと・・・
・Fケースこの三つの可能性がある。関係各機関は引き続き対応の方をよろしいお願いします」

二時間近くかかった秘密会議が終わり参加者がそれぞれの機関に戻っていくなか円卓のテーブルには総理と田村空幕長が残っていたお互い顔を見合わせるず黙ってた天井を仰いでいた。別に天井に何かがあるわけではないが二人ともどうやって話しを切り出すかわからないのでひたすら天井を見上げるしかなかった

「健吾！すまねえな、うちの若い者が迷惑かけちゃった！」
先に切り出したのは田村空幕長、しかし、その口調は会議のときとは全く違う

「いや、しょうがないよ叔父さのせいじゃない、迷惑かけられたなんて思っていないし・・・」

「だが・・・」

「本当、叔父さんは自分が悪いと思うと別に謝んなくていいことまで謝って・・・親父そっくりだ！」

「お前の親父の弟だからな・・・でもお前の親父はおれの知ってる総理大臣の中で一番立派なやつだったよ・・・だけどいくら何たってお前が『あれ』までしよい込む必要ないぜ世間、いや野党の二党なんか『世襲総理の世襲政策』とか『憲法壊しの息子も憲法壊し』とか言われて！ただでさえ42歳の青二才とか思われてるのに・・・お前は親父そっくりな立派な総理だよ、この国の傾いた景気をお前は日本製品を総理自ら売りだすことで日本景気をよくした。いまじゃアメリカの大陸を日本産の新幹線が何台も走って

る！だから・・・もういいんだもし『あれ』を議会に提出したら日本中から叩かれんだぞ！！』

田村空幕長が総理に叫ぶようにしつ言った

「叔父さん、おれのこと心配してくれるのはうれしい・・・おれも怖いよ、この法案を正式に提出したら日本国民の2割を敵に回すかもしれない！だけど、それで逃げたらいつまでたっても有事法制が成立しないよ！この国を護るには今必要なんだ！祖父や親父そして叔父さんが護ってきたこの国を護るためには！」

総理は静かにそういった

「・・・だからか？お前がこの国を好きだから今だに『T・N』・・・高町なのは

『F・T』フエイト・T・ハラウンそれに『Y・H』八神はやて、この三人をお前は憎んでいるのか！」 田村空幕長が総理にいうとそれまでの笑顔が消え田村空幕僚長を睨む。

「叔父さん・・・あまり奴らの本名を口にしないでくれる・・・たしかにいまでも恨んでるし憎んでいるよ！彼女達のせいでこの国は・・・この国の国民はどんな危険なめにあったか叔父さんだって知ってるだろう！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「奴らがいつたいどんなことをした？たしかに直接的な被害なかった！だが！一歩間違えば大勢のなんの関係もない普通の国民が死んでたんだ！！しかも タサズ の連中『Y・H』のときは海鳴市ひとつ滅ぼす攻撃をぶち込むつもりだった！！日本人の命なんかどうだっていいのかよ！！しかも、政府には何も知らせるなかった！」

R・H』のマンションを盗聴してやつと知ったんじゃないか！しかもなんだかんだ言って奴ら三人はいまじゃ向こうでは　タサズのエリート幹部だって！！冗談じゃない『F・T』と『Y・H』は犯罪者じゃないか！なんで重職についてるだ！」

テーブルを叩て激昂する総理。

「・・・・・・・・・・」

田村空幕長は悲しそうな表情で総理の手を抑えた。

「健吾！やめろ！」

空幕長に止められて総理は自分が手の平から血が出るぐらい叩いていたのにきずいた。

「すいません。・・・・・・・・少し言い過ぎた。」　総理は手を抑えながら謝る。

田村空幕長はそんな彼をただ悲しい表情で見るしかできなかった。

「じゃあ・・そろそろ官邸に戻るよ！今日は日共党の馬鹿メガネと会わないきゃいけないんでさ、ほんと中国の使い魔は騒がしくてこまるよ！あいつら全員リストラするかな？浮いた予算は、まあ防衛省にでも回すよ！」

総理はいつもの表情に戻ると田村空幕長ににこやかに微笑み、会議室のドアの前まで行きドアノブに手を掛けて

「叔父さ・・いや、田村空幕長！もし、今回の件がFケースであつたら、パイロットの帰還交渉に全力を尽くすが、　タサズ　がパイロットを盾にして我が国の主権を脅かすようならば帰還交渉を打ち切る！国の主権が脅かさればこの国の国民の平和は二度ともどらない！！例えパイロットの家族に罵られようと！国を護るために

非情な決断をしなければならぬことをご承知願いたい！」

総理は振り向かず、低い声で言い放つ。

田村空幕長は立ち上がり総理の後ろ姿に向け敬礼をした。

「田村総理！彼らは自衛官になったときから国民の平和と安全を命を賭けて護ると覚悟しています！それは自分も同じです。総理が日本と国民のためと決断するのであれば田村信介空将は田村総理を支持します」 田村空幕長は力強い表情で敬礼しながら言った。

この二人はわかっているのだ、自分達がこの国を護るために命を張る二人の自衛官をもしもの時に見捨てようとしていることを！

だが、二人の自衛官と国民の平和を天秤にかけるわけにいかない！

総理が会議室を出て言った後、田村空幕長は椅子に腰掛け目を閉じる、まぶたに写るのはかつて自分とかつての相棒を救ってくれた異界の三人の防人。

「キールさん、ミゼットさん、レオーネさん！・・・あんだ達の言っていた平和は・・・なにも関係のない人を屍にして築くことか！・・・だれの命も分け隔てなく護るんじゃないやなかったのか！なんの関係のなかった子供たちを巻き込むことなのか！」

田村空幕長はまぶたに浮かんだ恩人達に怒りをぶつけた。

もし、この場所に彼の恩人がいたらなんと言っのだろうか？

田村空幕長の問い掛けに答える者はいない。

市ヶ谷の陰（後書き）

次回予告

日陰者になってくれ！とかつてある総理が言った。
それは、彼らが日陰者の内はこの国は平和だからだ
彼らは戦う子供たちに

戦う子供たちは彼らに

なぜ、戦うかを問い掛ける

機動六課の狸（前書き）

はじめに、すみません！今回も無茶苦茶かつ常識を無視した展開です！また前回予告した内容と全く異なります！本当にすみません！どうか怒らずに広い心で読んでください。

機動六課の狸

機動六課食堂

応接室で隊長三人組との一悶着の後に鹿島達は機動六課長の食堂へとやって来た。なぜかというとまだ朝食を食べておらず、また二人は機動六課で身柄を預かることになるので課員たちに紹介しなければならぬ。そこで朝食で大半の課員が集まる食堂で紹介されることになって食堂に来了。

「みんな知ってるかも知れへんがこちらさんは機動六課で保護することになった次元漂流者の方や。わたしや高町隊長の母国の人や……それでは鹿島さん、立川さんお願いします。」

はやては隣で腕を後ろで組んでいる鹿島と立川に自己紹介を促す。

それに応え一歩前に出て踵を合わせ敬礼の体勢をとる。

「日本国航空自衛隊北部航空方面隊第二航空団第203飛行隊所属鹿島衛三等空佐です。次元漂流者ということで機動六課にお世話になることになりました。いろいろとご迷惑をおかけすかとおもいますがよろしくお願いします。」

「立川慎吾三等空です。所属は鹿島三佐と同じです。F-15J戦闘機のパイロットなので機体整備で整備班の方にはご協力をお願いしますと思います。機動六課の皆さんには我々が帰還するまでお世話になります。……まあ、階級とかはあまり気にせずに気軽に話しかけてやってください！」 自己紹介を終えて再び敬礼をする。

威厳ある敬礼であるが物腰は柔らかい。

いくら三等空佐といえ保護される身なので階級はあまり関係がなく機動六課員達と良好な関係を築く必要がある。

はやてによればごく低い確率で全く似た世界から転移して来る次元漂流者というのがいるらしい。俗にいうパラレルワールドの住人というやつだが、幸いなことにははやてやなのはと同じ地球から来たことが解った。

この世界から日本に行くには地球に繋がっている転送ポットとかいう物で転送されるか管理局が保有する次元航艦とかいう次元世界を行き来できる戦艦で地球のまでいくからしい。だが、帰り方が解ったから今すぐ帰れるわけでもない。民間人ならばすぐに帰れるのだが鹿島達は自衛官でありさらに任務中に戦闘機ごとこちらの世界に来てしまったことからすぐに帰るといっわけにいかなくなった。さらには、鹿島達が見たガジェットというロボット兵器や謎のホールのこともあつて管理局上層部にて処遇や地球のガジェットに関して議論するから最低でも一週間は这个世界にいななければならない。

そこで最も問題となるのがF-15Jイーグルの整備のことだ。人間が衛生を保つために毎日入浴して身体を洗うの同じように戦闘機も毎日の機体整備が必要となる。

イーグルは昨夜のうちに空港から機動六課の航空機格納庫に運ばれ六課で管理することになった。つまり、ここにいる間は鹿島達が整備しなければならない。戦闘機パイロットである二人だが機体のメンテナスもできるので問題はないが戦闘機整備は一機につき5人以上の整備士が必要になる。二人だけで機体整備はかなりきつい。

そこで、機動六課の航空機整備班の整備士に整備を手伝わせようかとははやてが提案してきたのだ。

当初、鹿島ははやての提案に

『お気持ちはありがたいけど、整備班の仕事が増えてしまうから整備は自分達でなんとかするよ』

立川も

『そこまで迷惑かけられないよ！機体メンテナースはおれも鹿島もできるからなんとかなる！』

二人ともはやての提案を丁寧に断った。単純に整備班の仕事を増やしてしまうという理由もあるが、それ以上に『動く防衛機密』であるイーグルを部外者に整備させて情報漏洩を恐れたからだ。

いまでこそインターネットでイーグルの性能はある程度調べられるが重要な部分はもちろん非公開だ。

もし、機体の情報が漏れるとその情報をもとにイーグルの性能やさらには欠点さえも研究されてイーグルを上回る戦闘機を開発されたり、対イーグル戦術を作られたてしまう。

例えば、戦時中に当初無敵だったゼロ戦が米軍戦闘機に勝てなくなったのは、ゼロ戦が米軍に捕獲され完全に性能が解ってしまったからだ。

だが、はやては機動六課長として二人をある程度管理下におかなければならないので二人だけで整備させるわけにはいかないのだ。

「でもお二人さん、二人だけで整備やるのはキツイやないですか？わたしは戦闘機のこととはわからんさかいなんともいえへんが、六課のヘリ整備は結構な人数でやっとりますが、まかさ戦闘機の整備はヘリ整備より楽なんです？」

はやては不敵な笑みを浮かべ挑発するような口調で言った。

「……………」

二人はしばらくはやての思惑を見定めるようにはやての目を見る。

不敵な笑みを浮かべ相手動きを待つはやて、こちらの考えを読まれないために余裕な笑みを浮かべ相手を見つめる鹿島と立川。

なるほど、二等陸佐は伊達じゃないか！魔法だけで出世したのか
と思っていたがこりやとんでもない狸だな！二人だけにしてもしもの
ときは責任を問われるから“お目付け”を付けようって腹積もり
らしい！…………話しに乗るしかないか…………どちらにせよ二人だけ
で完全な整備は不可能だからな…………

鹿島ははやての提案を呑むしかないと思ったが、ただで呑む鹿島
ではない。

「わかったよ、たしかに二人だけでは無理があるしな。…………ただ
し条件があるんだけど」 はやては鹿島が話しを呑むと推測しては
いたが条件付きで呑むとは思ってもいなかった。

「条件：なんでしょう」

「なに、そんな難しい条件ではない、まず一つは整備班から信頼
のおける整備士を厳選してイーグル整備班を編成すること、イーグ
ル整備中はいつさいの記録は取らないこと、三つコックピットなど
の重要箇所は六課の整備士はいつさい触れないこと、四つ機体整備
は我々の指示と指導の下に行うこと、五つ情報の守秘を徹底するこ
と、六つ整備班はイーグルの関連に限り我々の完全な指揮下におく
こと、…………以上です。」

鹿島の述べた条件にはやては呆気にとられて表情を崩した。

「六つ目の条件がよくわからへんのですが、わたしの解釈違いでなければ鹿島さん“わたしの部下”をなんでか“鹿島さん達の部下にしる”と言っているようにも思えるのですが？」

はやては表情を戻すが、先程の不敵な笑みではなく目が笑ってなく、黒い負のオーラを漂わせている。

だが、鹿島はそのオーラを涼しい表情で受け流す。

「まあ……そういう解釈で間違いじゃないな、まず一つ目は信頼の置けない整備士にイーグルを整備させるわけにはいけないからだね、課長のお墨付きならとりあえず安心ができる、二つ目は機体の構造なんかをメモしたりしてそれをなくされたりしたら困るわけだし、おかしなところに拾われたら大変なことになる。三つ目はイーグルってのは重要機密の塊みたいなものでくにコックピットは戦闘機の頭でみたいなもんだ、人間にとって頭が生きていくのに重要なように戦闘機にとっても同じでね、部外者に整備させるわけにはいかないんだ。」

四つ目ののはヘリと戦闘機では勝手が違う、いくら整備のプロでも戦闘機に関しては全くの素人、素人が玄人の指示と指導を受けるのは当たり前のことだろ。五つ目ののはさっきも言ったけどイーグルは重要機密の塊なんだ、整備士がイーグル整備で知り得たことを口外されると困る！日本の主力戦闘機が骨ね抜きにされてしまう、これは整備士だけでなく六課全員にお願いしたい！」 「まあ……五つ目まではようわかりました！五つ目までなら条件を呑めんでもないですが………」

「まあ、まだ説明はしてないからな！……これはいままで挙げた条件もかぶるんだが、イーグルは『動く防衛機密』なんだ、イーグルを部外者に整備させるには最大限の情報の守秘や整備士の監視が

必要になるが、ここでは我々が部外者だから機動六課整備士の監視も指揮も不可能だ、そこで八神二等陸佐が厳選したイーグル整備班をイーグル整備関連のみに限り我々の指揮下におく、これにより我々はイーグルの関連で整備士を管理しさらに機体整備でも『オブザーバ』として指導指示するわけでなく『責任者』として命令を下せる、もちろんそれ以下は間違いなく八神二等陸佐の部下であることに変わりはない。早い話しが、イーグルの整備の時だけ部下として人材を派遣してつてことだ。我々は整備を指導指示しながら機体情報守秘と監視ができる、八神二佐は部下をイーグルの整備の時にのみ人員を派遣し整備をさせながら監視もさせる、つまりは相互監視ができるわけだ。」

鹿島は終始涼しい表情をたまちながら説明したがそれとは対照的にはやては鹿島の条件の本当の意味とその無謀さに呆氣にとられた「そんな……無理に決まっとる！そんなん上が許可するわけあらへん！」「別に上の人達にすべて報告する必要はない、そもそも上層部の今の懸案事項は我々がイーグルでよからんことをしないかだろうから上層部が六課に期待することは我々が不穏な動きがないか監視しもしものときの対策だ。整備のことなんて興味はないだから報告する必要はない。もしも上に聞かれたら、『機体整備はパイロットの指導の下で行い、その間の監視も厳重にしている』とでもいえばいい。」

「無茶言わんでくださいよ！上に黙ってそんな越権行為を公認してしかも虚偽報告しろ言んですか！ばれたらタダではすみませんよ！」

はやては必死な表情で首を横に振って諦めるように言つが、鹿島はニヤリと笑う。

「たしかに無茶なことだけど、日本の主力戦闘機を関係者以外の者に整備させるのだからこれくらいの無茶はしなきゃならないでね、それに八神さんこそ上層部に隠し事の二つや三つ、無茶の一つや二つあるんでしょう？それに隠し事と無茶が一つプラスされるだけな話しだ！」

はやては鹿島の言葉に驚いたがなんとか不敵な笑みを浮かべようとする。

「どうゆう意味やろ？」

「そのままの意味だよ、この課は『レリックの対策と独立性の高い少数精鋭部隊の実験運用』を目的に八神さんが提唱して設立したのだろ、でも少数精鋭部隊のわりに前線隊員は10歳から16歳の子供で課長と分隊長が幼なじみ！こんな無茶苦茶な構成で普通は通るはずがないのに通ったと言うことは上に強力なコネクションがあるということだ。だが、八神さんが自分の部隊を持ちたいというのならもう少し経験と年齢を積んでからのほうがいいはずなのにまだ未成年のうちに自分の部隊を造った、なにかを焦るように！もしかしてこの課には…いや、八神さんには何か別の目的があるんじゃないか？少なくとも上層部には言えないような？」

「そんな、まるでわたしがなにか悪いことでも企んでるみたいやないですか」 はやては笑いながらなんとか取り繕うも冷や汗を流している。

その冷や汗を見て、鹿島は何か別の目的があると確信した。

鹿島はこの機動六課の話しを聞くうちにいくつか疑問を持っていた。

未成年のはやてが課長なのは『優秀な魔導師は若くても出世させる』という管理局の人事方針だからだと考えていたが実ははやて自身が上に提唱して造った部隊だと聞いてまず一つの疑問を持った。未成年であるはやてが『部隊造りたい』といっても絶対に許可しない。部隊指揮官は部下の命と多大な責任を負う、それが故に部隊指揮官は経験とある程度の年齢が必要になる。二つ目の疑問は部隊の任務内容が『レリックの対策と独立性の高い少数精鋭部隊の実験運用』つまりレリック対策と独自に動ける特殊部隊の実験を併合して行うということだがとてもじゃないがさっきの子供たちが特殊部隊員には見えないし分隊長二人がはやての幼なじみという無茶苦茶な人選だ。

この無茶な部隊が上の承認を得てわずか二個分隊のために新規に施設を建設し輸送ヘリを配備し整備班と支援班を組織、一年間だけでかなりの予算を消費するはずだ。

これを考えるにははやてはかなり強力なコネクションを持っていて上層部に働き掛けさせたのだろ。だが、何故彼女はここまでして機動六課を造る必要があるのか？部隊指揮官になりたくて修業のために期間限定の部隊をつくったのか？いや、指揮官修業なら自分で部隊を造らずともいずれどこの部隊の上級幹部で経験を積み部隊指揮官に任命されるまで待てばいい。時間はかかるがそっちの方がリスクは少なくて済む。

だが、彼女はそれを待たずにコネクションを駆使して無茶苦茶な人選の部隊を造った。まるでいまやらなきゃいけないかのようにつまり彼女にはレリック対策と特殊部隊実験運用以外に何か目的がある！おそらくは上層部さえも知らない目的がある！

そして鹿島は試しにはやてに鎌をかけてみたのだ。結果は黒だった。彼女は何かを隠している『だったらその隠し事に便乗させて

もらっ』それが鹿島の立てた策だ。

はやては鹿島の真意に気がつき『しまった』という顔をしている。

そこに割り込んできた男が一人いた。

「まあさゝ八神さんが駄目ってんならさゝ諦めて二人で整備やるしかないよ」

いままで黙って二人のやり取りを見ていた立川が鹿島を止めるように割り込んできたがそれは立川の本意ではないことは長年の相棒である鹿島は察した。

「まゝさ！そもそもさ！勝手に他機関の人間を指揮下になんて違法だよ！自衛隊法に違反してるぜ！鹿島、ばれたら懲戒は免れないから！二人で整備すればいいよな！」立川はそこで止めると芝居かかった口調をさらにわざとらしく大きな声を出して

「あゝでもあれだ、二人だけとなるとあれに気をつけないとな！“ミサイルの誤爆”とか！“ジェット燃料の爆発”とか！なにせ二人だけだからねゝリスク増えるじゃないか！たぶん爆発したらこの施設こんがりと真っ黒焦げになるな！あゝま、もしものときは八神さん責任の方頼むよ！無責任かもしれないがミサイルやジェット燃料の爆発に巻き込まれたら助からないから責任とりたくてもとれないからなゝ！そのときは施設責任者の八神二等陸佐にどうかよろしくお願いします。」立川はおどけた口調ではやての恐怖心を煽った。

鹿島とはやてのやり取りをただ見ていたわけではなく流れを読みはやてが不利になったと同時に口調で割って入ってきた、それもわざと『誤爆』と『責任』という部分のところを口調を強めてだ

「ふははは……も…完敗や……完敗……鹿島さんにも立川さんにも勝てへんわ！わかった！条件を吞みますわ！さすがに隊舎を真っ黒焦げにされるのも困りますさかいな！」

はやては大笑いして何か吹っ切った顔でそう言った

「悪いな八神さん、イーグルを機動六課で管理することとは国家機密を機動六課で管理することなんだ、このぐらいのこととはしないといけないでな許してください。」

鹿島と立川ははやてに頭を下げたがはやてはばつの悪いような顔をしていた。

応接室の静かな政略争いは狸にではなく策士に軍配が上がった。

ちなみになのはとフェイトは話しについて行けずに完全に取り残されていた。さらにははやてが朝食へ行こうと言ったときにはのはとフェイトはかなり喜んでいった。

このあと鹿島と立川は食堂で小さな戦士達と出会う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0568m/>

魔法少女リリカルなのは 平和への回帰

2010年11月29日07時14分発行